

自然環境保全活動を通して 大人の社会に触れる

茨城県立茨城東高等学校では2011年から、キャリア教育の一環として環境学習に取り組み、各年次で自然環境保全活動を行ってきた。授業を通じてただ学ぶだけではなく、生徒たちが自ら実践できる活動はないか。そう考えるようになり、2015年7月に立ち上げたのが全校生徒と教職員、約500名による「We are 酒沼っ子」プロジェクトだ。自然環境保全活動を通してさまざまな人と関わることで生まれる生徒の意識の変化は大きいという。取り組みについて伺った。

授業と、生徒たちの 自主活動を組み合わせる

どの地域にも特有の自然環境がある。自らが生きる地域の自然に向け持続できるような働き掛けることも、個々人のキャリアを考える上では重要と考え、2011年の学科改編時からカリキュラムに取り入れてきたのが茨城県立茨城東高等学校だ。

同校では独自の学校設定科目「キャリアアデザイン」の中で環境学習を実施するほか、理科の学校設定科目「酒沼と自然」、生徒主体の「We are 酒沼っ子」プロジェクトでも自然と

関わり、環境保全活動を行ってきた。

新堀洋子先生は次のように説明する。

「環境学習としては、1年生は茨城町内にある酒沼での水質調査や野鳥観察、2年生では茨城町の間伐材を用いたマイ箸作り、3年生では学校保有林の整備と、3年生を通して酒沼を中心とした環境活動を行っています。もともと生徒主体で何かできないかと考え始めた2015年5月に、酒沼がラムサール条約に登録されました。酒沼の水は今でこそきれいですが、以前はかなりの水質が悪かったのです。そこで、生徒主体の「We are 酒沼っ子」プロジェクトを立ち上げ、洗剤量を減らせるアクリルたわしを作る活動から始めました」。

コアメンバーはいるが、「We are 酒沼っ子」自体は全生徒と教職員全員で取り組む活動。「We are 酒沼っ子」という大プロジェクトの下に、個別の活動があるというイメージだ。アクリルたわしを広めるためワークショップを行うチーム、学校保有林を整備するチーム、外部に向けて発表をする人材などが、適材適所に散りばめられている。理科の選択科目「酒沼と自然」を受講する生徒も、チーム「酒沼と自然」としてここに組み込まれている。

新堀先生は「We are 酒沼っ子」の全体の取りまとめ役。「外部との連携で何か個別の活動が発生したときに、生徒に知らせて人を募ったり、外部との連絡を担当しています」。



(後列左から) 新堀洋子先生、佐藤美波先生、加藤浩二先生、「NPO 環〜WA」代表理事の大和文子さん。(前列左から) 卒業生の三森洸喜さん、3年生の高根澤拓真さん

加藤浩二先生と佐藤美波先生は共に理科の教員だ。加藤先生は5年前から、佐藤先生は2年前から理科の「涸沼と自然」を受け持ってきた。加藤先生は環境科学系の研究をした経験から、環境への取り組みについて生徒にアドバイスすることもある。

同校の自然環境保全教育に大きく関わりを持ってきたのが、「NPO 環〜WA」の代表理事を務める大和文子さん。大和さんは「学校保

有林の保全をしませんか、と声を掛けたのは私なんです」と話す。

「2013年4月に設立した『NPO 環〜WA』は、豊かな自然と共にある里山の未来を創造する人材の育成を目指しています。設立から間もなく私たちは茨城東高校の敷地に隣接する場所の環境保全を始めました。学校保有林を挟んで手前と奥側に我々が進めようとしている場所があったのです。当時の教頭先生に『学校保有林があるのをご存じですか』と話すところ『知らなかった』と。これはよい機会だと思い、一緒に環境教育のプログラムを始めませんかと投げ掛けたところ、理科の先生に話してくださいと準備が始まりました。2013年に足掛かりとなる授業を数回行い、2014年度から正式に『涸沼と自然』の中で『セイブフォレストプロジェクト』が始まりました。

以来、大和さん率いるNPO 環〜WAが月に1回、指導を担当しており、今年度が4年目となる。年度の最初に生徒たちと一緒に学校周辺の環境を視察して、2回目以降は、生徒が視察して見つけた課題の解決あるいはやってみようというのを生徒たちが形作って取り組んでいく。整備にはリスクが伴い、技術も必要なため、技術を持った指導者を大和さんがコーディネートしているという。

「生徒たちは数年後には社会に出ていきます。自然の中で自分たちが考えて起こしたアクションが、やがて環境をつくり、社会をつくっていくことを体験してもらえれば授業にしたいと思っています」(大和さん)。

●卒業生が語る成果

さまざまな人と触れ合い、大勢の人前で話す力がついた

「We are 涸沼っ子!」の最初のコアメンバーとして先生方が声を掛けたのが三森洸喜さんだ。現在は常磐大学人間科学部現代社会学科1年生。

「僕は当時2年生で生徒会長。先生から自然環境保全の活動を生徒たちでもっと進めてみないかと声を掛けられました。副会長と『何か新しいことをしよう』と話していたので、じゃあやってみようかと。ですから最初のコアメンバーは生徒会役員。環境保全についての知識はありませんでしたが、先生から説明を受けていくうちに僕たちの中にもアイデアが湧いてきました。そこから三森さんは2年間、「We are 涸沼っ子!」の代表として活動する。授業でアクリルたわしの作り方を学んで、それを校外で広めたり、年間を通して取り組んだ環境保全



1年生「キャリアデザイン」の環境学習では、涸沼の水質調査を行う

活動について水戸市で行われた「いばらき若者セッション」でポスターセッションをしたり、茨城大学で開催された「第2回大会 関東近県生涯学習・社会教育実践交流会」で高校生唯一の発表を行ったりと、学校の活動を外部に伝えることにも力を尽くした。

「活動を通して学校外の社会人と接することが多かったです。一番よかったのは、大勢の人の前で話す力がついたこと。もともと生徒会長になったのも、将来を考えたと共に、今のうちに人の前に出る機会を経験しておかないと社会でいい仕事ができないんじゃないかという不安があった、自分を変えたかったからなんです。それまでは年上の人と話すこともあまりなかった

ので、最初は自分から話し掛けられなかったし質問もできなかった。ポスターセッションなど、まったく知らない人ばかりの場や大勢の前で発表する機会が増えたおかげで、人前で話すことや大人の前で話すことに慣れていきました。とは言っても、説明したりするのは初めてだったのでいつもとても緊張していましたね。

今、大学では皆の前で発表する機会が多く、聞き手の人数も高校とは全然違います。そういうところで怖がらないで話せるのは、『We are 涸沼っ子!』の成果だと思います。

成果は、それだけにとどまらない。同年代の人たちとコミュニケーションを取って、どういうことをしようかを決めていく決断力がついたこと、それまで知らなかった茨城の現状や問題を知ったこと、アクリルたわしのワークショップで参加者に「作り方を教えてくれてありがとう」と感謝されて喜びを感じたこと。どれも三森さんが、『We are 涸沼っ子!』を通じ

て得た成果だ。

3年生になったとき、もう1年間代表をやるかどうか悩んだというが、「ここまでやってきたなら最後までやろう」と決めた。だからその達成感は大きかったと三森さんは振り返る。

「プロジェクトがここまで大きくなるとは思っていなかったもので、廊下や教室に活動の成果をまとめたポスターが貼ってあるのを眺めながら、こんなことをやっていたなと振り返ると、感慨深いものがあります。後輩が引き継いでやっているのもうれいすね。

僕は『We are 涸沼っ子!』でさまざまな活動をしましたが、やりたいと思うことがあったら、人に相談することが大切なんだと学びました。例えば僕が何か活動したいと思って一人で始めようとしても、たぶん思うような活動はできないと思う。でも先生やいろいろなつながりを持つ人に相談をすれば、『一緒にやろう』と言う人もいますし、『こういう支援をするよ』と言う人もいます。幅が広がる。だから誰かに相談をすることは大切だと思います。

僕は高校時代にプロジェクトの代表になったことが、自分の成長につながったと感じています。言葉にするのは難しいのですが、昔とは違うというか、一皮むけた感じはある。小学校・中学校ではできなかったことができるようになる

り、苦手を克服できた。生徒会長だけだったら学校内の人とのコミュニケーションにとどまっていたでしょう。この活動のおかげで、いろいろな人と触れ合う機会があったことが成長につながりました。また、学校で一丸となってこういう活動をして、それが今も続いている。学校としてもよかつたんだろうと思います」。

● 在校生が語る成果

引き継ぎ、つなぐ活動の一翼を担えたことがうれしい

3年生の高根澤拓真さんは、三森さんの1学年下に当たり、3年生になって「涸沼と自然」を選択し、その中心的な役割を担った。

高根澤さんが「涸沼と自然」を選択したきっかけは、授業選択で迷っていたときに先輩方の活動を知り、体験活動の多い授業内容に興味を持ったからである。

「涸沼の近くに父親の実家があり、小さいときには涸沼で遊んだこともあったので、涸沼には興味を持っていました。『涸沼と自然』は座って勉強するだけの普通の授業とは違うという期待もありました。『セイブフォレストプロジェクト』では過去に三森先輩たちがやってきたことにプラスして新しいことをやってみようと、

メンバーがそれぞれ『手すりを作りたい』『階段を直したい』『ベンチを置きたい』とさまざまな計画を立て、先生と調整しながら作業を進め、最後に成果発表をしました。

生徒は17人で、10人ぐらいで階段作りをして、残りの人でベンチ作り。僕は階段作りのチーフになりました。しつかりしなきゃと最初は緊張していましたが、階段の作り方を調べ、これがいいかなと思って自分で作ってみました。達成感があったので自信を持つことができました。達成感を取り組み、自然についても学ぶことができました」。

1年を通して、高根澤さんの活動ぶりを見守ってきた大和さんは、彼をこう評価する。

「高根澤くんは非常に主体的なのです。どの生徒も、年度の最後のころにはモチベーションが上がってくるのですが、高根澤くんは、自分自身が何ができるか、みんなで何ができるのか、目標設定したものをしつかりやりたいという意志がすごく見えました。この授業では、学校保有林を整備して、そこで出た間伐材でペレット（間伐で出てきたムダ木や枝を粉にして固めたもの）を作ります。一方で、畑に種をまいて農作物を収穫して、収穫祭ではペレットやまきを燃やして収穫した農作物を調理する、という

た一連の流れでいろいろな学びをしています。高根澤くんは、どれも体験しておきたいという積極性を発揮してきちんとやる。先を見て行動し、できるだけ自分なりの経験を積み上げたいという気持ちが行動に表れていました」。

活動を通して、学校以外の人とも触れ合うことになる。このことを通して、自身の中に何か変化はあったのだろうか。高根澤さんは1年間を振り返ってこう話す。

「先生と生徒だけでなく、ペレット作りは通信販売のカタログハウスの方々や、水質調査では茨城町水と自然を守る会（現 NPO 法人ひぬま生態系再生プロジェクト）の方々など、いろいろな人と関わりを持つことができて、楽しいし、素晴らしいことだと思いました。高齢の方に教わる中で、この人はこんなことまで知っているのだなと分かったり、だんだん自分の中にもその人たちの技術が入ってくるのが感じられました。『涸沼と自然』では自分で考えて話すだけでなく、『これって何をやるんですか』『こーやるんですね』といった話し合いが持てるのがよかったです。僕は接客のアルバイトをしています。『いらっしやいませ』『ありがとうございます』『お待たせいたしました』と決まったことを言うだけのアルバイトとは違います。大人と関わることで自分を目標にしていたわけで

はありませんが、社会人になったときにも慌てず冷静に対応できるようになったのではないかと思います。

僕たち自身、三森先輩たちがやったことを引き継いでやっているわけですから、僕たちの代でできなかったものを後輩に託していけるのは、うれしい。それで、また新たなものができていく。もしかしたら僕はそれを見ることはできないかもしれませんが、受け継がれていく活動に参加できたことは、とてもうれしいですね」。

自然を通じて、生徒たちを地域社会とつなげる

先生方はこのプロジェクトを通して、生徒たちに何を学んでほしいのだろうか。

佐藤先生は、自分自身の中にも、意識の変化があったと話す。

「まだ関わって2年目なので勉強中ですが、実際にこのプログラムに関わらなければ、私自身こんないろいろなことを経験しなかったと思います。高校生にさまざまな経験をしてもらい、自分たちの手でも何かできるという自信を付けさせたい。また、保全活動やボランティア活動は『誰かがやるだろう』という思いで見

いたところが私自身にもあったので、そうじゃなくて自分たちにもできると知ってほしい。そして、これらの活動に関わることで、いろいろな成長を遂げてほしいと思っています」。

加藤先生は、前任校でつながりがあった茨城町水と自然を守る会（現 NPO 法人ひぬま生態系再生プロジェクト）と、活動を通して再会した。

「転任した時につながりはいったん切れてしまったのですが、本校で別の形で紹介されて、お互いに『あれ、あのときのー』と再びつながりがありました。社会ではよくあることですよね。そう考えると、生徒たちも、今のつながりが一度は切れてしまっても、これから社会に出たときに、いろいろなところで助けてくれる、あるいは助けてあげられる可能性はある。やはり人と人とのつながりがこの社会をつくっていることを、私自身実感しています。涸沼を中心に、こういったつながりが増えていってくれたらという思いがあります」。

新堀先生も、人と人とのつながり、地域社会との連携の効果を強調する。

『We are 涸沼っ子』は、涸沼や学校保有限だけでなく、学校外のさまざまな人とつながりが生まれます。自然環境保全にかぎらず茨城町の方々と連携する活動が多いので、茨城

町に一つしかない高校として、ゆくゆくは生徒たちの手で茨城町を元気にしていきたい。そしてこのような活動を通して、茨城町に貢献したいと思うように、生徒たちが育っていったらという願いがあります。

生徒たちには、子供から高齢者まで、世代間交流の中で自分がどうすればいいのかと考えて行動できるようになってほしい。私たちも『後自分たちの力でやりなさいよ』と意識して手を離しているのが、教員には頼れない、自分たちで考えないといけないと思って行動してくれています。自然に問題解決能力が伸びてくる。こういった目に見えない力は、学校の中だけではどうしても身に付きません。だからこそ、活動を通してしっかり身に付けてほしいと考えています」。

新堀先生の言葉に、三森さんは「校外に出てアクリルたわしのワークショップをしたときも、参加者への指導などは、先生は本当に手伝ってくれなかった。最初はちよつとびっくりしました」と振り返る。

「でも、『あ、これはそういう指導の仕方なんだな』と。後から思えば、生徒だけでもやり遂げられたのでよかったです（三森さん）。先生方の意図はしっかりと酌み取ってもらえたようだ。

2 ● 社会との多様なつながり



「潤沼と自然」での学校林保全活動。植樹や手入れだけでなく、階段を作ったりベンチを作ったりと多彩な活動を取り入れている

大和さんは「私もここ、茨城町の生まれ育ちなんですよ。農家で里山の出身」と笑顔を見せる。外部から関わる立場として、何を目指しているのだろうか。

「先生方は教育のプロフェッショナルです。学校が社会とつながるために教員が積極的に行動せよという意見もありますが、先生の本分からすると、そこまで求めるのは無理があります。だからこそ、

我々のようなNPOが担える役割があるのです。

私としてはただ技術を教えるだけではなく、その技術がなぜ必要か、それが社会にどう影響するかを伝える経験をした人、あるいは技術を持った人や事業者、そういった人たちがダイレクトに生徒に教えていく形を提供したい。生徒たちは、年度末にはしっかりと成果を上げてくれます。自分たちが関わった結果、

どこにどんな結果を残していくのか。この中にはもちろん地域経済への影響も含まれていて、この経済の循環が広くなるとどうなるかや、地域の中・外部と連携することの影響、よい部分と悪い部分に関する内容も授業の中に盛り込んできました。ただどこか行って体験したというだけでなく、卒業後に大学や専門学校の学生、さらには社会人になったときにも、目の前にある事象を課題あるいは可能性として見出して、自分がどのようなアクションができるか、アクションをしたことによって何が変わるかを考えられるようになったらいいと思います。

生徒たちは1年間の活動を通して、先輩から引き継いで自分の代で実践し、それを後輩へつないでいきます。三森くんが卒業した後も活動はしっかりとつながっていて、高根澤くんは「自分たちは素晴らしい体験をしたので、僕らの後輩たちにはもっと素晴らしいことをやってほしい」と言いました。問題を捉えて計画してアクションして振り返り、何ができたのか、何が足りなかったのかを考え、次に残す。PDCAという言葉を学ぶ前に、生徒たちは身をもってPDCAを学んだのではないか。そうだといったかと思っっています。

そもそもキャリア教育は、特定の授業だけでできるものではないと、加藤先生は言う。

「例えば『キャリアデザイン』という科目はあるけれども、それだけでは身に付かない。学校の教育活動全体を通して実現できるものだと思います。『キャリアデザイン』で基礎的な部分を身に付けつつ、さまざまな人と関わり合い、それぞれの教科でサポートしていきながら、卒業していったときに結果として身に付いているもの。こう捉えると、本校は今、『We are 涸沼っ子』という、キャリア教育の根幹をなす活動を中心に動いているのだといえると思います」。

新堀先生も、全ては「結果として、キャリア教育につながっている」と話す。躍起になっ

力を身に付けようとしたのではなく、あくまでも結果なのだ。

「何より、生徒たちと一緒に活動していて、私たちも楽しいんですね。自然を体験すること自体ですが、生徒は気付いていなくても確かに一人一人が成長していて、それを間近で見ると、いいものを見たなと思って私たち教員のモチベーションも上がる。今日、高根澤くんが言った言葉が私にはとてもうれしく響いていて、また来年は何をしようかな、何を仕掛けようかなという気持ちが出てきています」。

『涸沼と自然』は毎年同じことはできないのです。だから教員側も頭をさびつかせてはいけな

い。生徒から刺激を受けて、今年は何をやるのかとも考えています」(新堀先生)。

「We are 涸沼っ子」プロジェクトは、もはや環境保全活動にとどまらず、茨城の伝統料理である「つと豆腐」の研究など、地域の文化を再発見し、それを広めることにも広がりがつある。自分たちの住まう地域をどう自分たちの手でよくしていくか。高校生と地域の人々が手を携えたとき、そこには大きな可能性が見えてくる。

(取材●百瀬崇・フリーライター)

まとめ編集部